209

二〇一九年度　入学試験問題

経済学部A方式Ⅰ日程・社会学部A方式Ⅰ日程・現代福祉学部A方式

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

四　問題冊子のページを切り離さないこと。

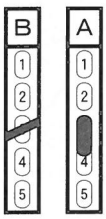
マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はＨＢの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

㈠　正しいマークの例

㈡　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ジョン・デューイ[注1]はその古典的名著『民主主義と教育』のなかで、学校教育制度が三つの機能を果たしていると考えた。社会的統合、平等、人格的発達である。

学校教育の果たす第一の機能として、デューイが取り上げているのは、社会的統合ということである。若い人々を教育して、社会が必要とする経済的、政治的、文化的役割を果たすことができるような社会人としての人間的成長を可能にしようとすることである。学校教育が果たす役割は、「子どもたちの一人一人が、生まれついた社会的集団の枠から逃れて、もっと広い環境に積極的にふれる機会を与えるように配慮することである」。

第二の機能は、平等に関わるものである。学校教育は、社会的、経済的体制が必然的に生み出す不平等を効果的に是正するというのが、デューイの主張しようとしたところであった。学校教育が、このように機会の平等化をもたらし、社会、経済体制の矛盾を相殺する役割を果たすということは、リベラル派の教育思想家たちだけでなく、現場の教師の人々の多くが信念としてもっている信条でもある。リベラル派の人のなかには、学校教育が機会の平等だけでなく、結果としての平等をも実現すると信じている人々も多い。学校教育の果たす、このような機能を、デューイは、平等主義的機能と呼んだのである。

デューイの強調した第三の機能は、個人の精神的、道徳的な発達をうながすという教育の果たす重要な役割であって、人格的発達の機能とも呼ばれるべきものである。一人一人の子どもたちは、それぞれ異なった、身体的、知的、情緒的、審美的な潜在能力をもっている。教育によってこれらの潜在能力をどのような方向に、どのような強度で発達させることができるかということについてもそれぞれ異なった面をもつ。

学校教育のパフォーマンスは、社会的統合、平等主義、人格的発達という、三つの機能について、一人一人の子どもたちにどれだけの効果を与えることができるかということによってはかられる。しかし、それは決して、単一的な尺度をもってはかることができないものであって、きわめて個性的なものであるということを指摘しておきたい。

学校教育が果たしている、社会的統合、平等主義、人格的発達という三つの機能は、社会体制の基本的前提と密接な関わりをもつ。この点について、デューイによって代表されるリベラリズムの立場は、資本主義という社会、経済体制について、政治面における民主主義と並んで、基本的に［ア］的な立場にたって、議論を進める。

デューイは、資本主義社会におけるさまざまな職業的選択が、学校教育によって可能となった人格的発達と不可分の関係にあると考えた。別の言葉で言えば、資本主義社会における職業的ヒエラルキーと、学校教育を通じて得られた人格的発達とが調和的な関係をもつと考えた。

デューイが提示したリベラルな学校教育制度の考え方は、もう一つの意味における平等主義の理念の実現を必要とする。［あ］、どんな僻地に生まれても、またどんな家庭で育っても、すべての子どもが、そのときどきの社会が供給できる最善の学校教育を受けることができるような制度的配慮がなされるべきであるということである。デューイは、この平等主義的な立場から、無償の公立学校制度によって、人種、民族的な差別、あるいは経済的、社会的階級、さらには男女の差別を相殺すべきであると考えた。このように、資本主義社会の中で、教育の果たす三つの機能が整合的に働くというのが、リベラリズムの基本的な考え方でもある。

デューイはこのように、アメリカにおける社会的制度が、資本主義と政治的民主主義によって規定され、そのなかで、学校教育の果たす三つの機能が完全に働くことができるような条件が備わっていると考えたのであった。

ジョン・デューイの教育理念は、二十世紀前半を通じて、アメリカのリベラリズムの考え方に沿った学校教育制度の基本的性格を規定していったといってもよい。しかし、ヴェトナム戦争を契機として起こったアメリカ社会の倫理的崩壊、社会的混乱によって、デューイの教育理念にもとづく公立学校を中心とするアメリカの学校教育制度もまた大きく変質せざるを得なかった。デューイの掲げた平等主義的な教育理念にもとづいてつくり出されたアメリカの学校教育制度が、現実の非人間的、収奪的状況のもとで、逆にアメリカ社会のもつ社会的矛盾、経済的不平等、文化的俗悪さをそのまま反映し、拡大再生産する社会的装置としての役割を果たすことになってしまったのである。―中略―

一九六〇年代の、このような状況を前にして、①リベラリズムの教育理念に対して、大きな修正が加えられることになった。デューイの掲げた教育の理念は、依然として有効なものとされているが、学校教育が労働の生産性に及ぼす効果がもっとも重要視されるようになってきた。これは、専門技術主義＝能力主義の考え方と呼ばれるものであって、学校教育の経済学的考察をおこなうときにもっとも基本的な考え方の一つとなっている。専門技術主義＝能力主義は、資本主義制度のもとでは、各人がどのような所得、権力、地位を得るかということが、それぞれ個人のもっている知的、身体的、その他の能力によって決まってくるという考え方にもとづいている。学校教育は、子どもたちの知的、身体的、その他の能力を育て、発達させるものであって、その効果は、学校教育を終えた若者たちが、どのような職業につき、どのような経済的、社会的報酬を得るかということに反映されている。学校教育を通じて、認知能力、思考能力が発達し、個人の人格的発達を可能とすることによって、卒業してから、資本主義社会のもとでの、雇用、報酬、権力配分の制度に適切に組み込まれるようになっているというのが、専門技術主義＝能力主義の立場である。

この考え方に立つとき、資本主義制度のもとでは、所得、権力、地位の分配の不平等は、労働者の知的、技術的、身体的能力の不平等にもとづくものとされる。［い］、資本主義社会における貧困、不平等の問題を解決するためには、学校教育の機会を平等化することがまず必要と考えられたのであった。じじつ、一九六〇年代に、アメリカで、教育制度の改革や新しい実験が数多く試みられたが、それは、一九六〇年代とくに顕在化した、アメリカ社会の貧困と不平等の問題に対処するためにとられたものであった。

しかし、このような専門技術主義＝能力主義の考え方は必ずしも統計的な分析によって支持されるものではない。とくに学歴の高さと経済的成功の間の統計的相関はあまり高くないということがわかっている。サミュエル・ボウルズ[注2]とハーバート・ギンタスの『アメリカ資本主義と学校教育』にくわしく述べられている通りである。学齢年数が高ければ高いほど、ＩＱ得点ではかった認知的知能到達度は高くなる傾向を示す。しかし、認知的知能到達度が高いということが、経済的成功を収めるという結果を生み出すとはかぎらない。学校教育と経済的成功との相関関係は、認知的知能到達度とは直接関係なく、経済的成功

に大きく寄与するのは、学校教育の果たす統合機能の役割であるということができよう。―中略―

専門技術主義＝能力主義の考え方は、産業資本主義体制のもとで、かなり［　イ　］力を持つ。高度に発展した技術を基礎に置く近代的産業の生産技術は、知的な教育を受けた人々によってはじめて効果的に機能する。経済活動の発展のためには、労働力全体としての知的な水準が高くならなければならない。学校教育は、これまで、ごく少数の特権階級だけが享受することのできた教育を、一般大衆にひろく開放し、近代的産業社会がもたらす利益を万人のものとするという、すぐれて平等主義的な思想が、その背後に存在している。

アメリカでは一九六〇年代を通じてリベラル派の教育理論にもとづく教育制度の改革が積極的に進められたが、いずれもほぼ完全といってよいほど失敗してしまった。そのもっとも主要な原因は、社会的統合、平等化、人格的発達という学校教育の機能が、法人資本主義[注3]という経済的、社会的体制のもとでは整合的なかたちで働くことができないということにあるというのが、ボウルズとギンタスの主張するところである。

法人資本主義体制のもとでは、社会的生産関係は②ヒエラルキー的分業にしたがって、官僚的秩序を通じて、上からの権限と管理の体系によって規定されている。生産を担当する企業は一つの有機体的な組織として、中枢的経営・管理体系によって秩序づけられていて、その社会的関係は決して民主主義的なものではないし、また効率的なものでもない。

民主主義の基本的な前提条件の一つに、人々が連帯して、相互に意思を疎通できるような制度であって、各人がそれぞれ内発的な関心と自発的な意向にもとづいて行動することができるような性向をもつということが必要とされている。［　う　］、法人資本主義のもとでは、このような条件はみたされない。労働者、技術者あるいは経営者自身すら、外部的な権威と市場的な基準にしたがって、各法人企業のヒエラルキー的分業に強制されているというのが実状である。学校教育を受けた青少年がどのようなかたちで雇用され、どのような環境のなかで働くかというと、このような、抑圧的な、非民主主義的なヒエラルキー的分業のなかである。法人資本主義体制のもとで、市場的な基準にしたがって、人々が雇用され、働くとき、そこには③内発的な動機にもとづいて、自らの行動を選択するということは、一般の労働者、技術者にとってはほとんど職を失うのと同じ意

味をもっている。

ボウルズとギンタスが、『アメリカ資本主義と学校教育』のなかで、もっとも力を込めて主張しようとしているのは、アメリカ資本主義という［ウ］的な法人資本主義体制の中で、学校制度は、かつてホレース・マンがいったような「偉大な平等化装置」という役割を果たさないどころではなく、逆に、法人資本主義体制のもとにおけるヒエラルキー的分業のもつ、非民主的、抑圧的な性向をいっそうつよめるという機能すら果たしているということである。「［A］」。

経済の社会的関係を規定する法人資本主義という制度そのものの改革には直接ふれないで、教育制度だけを改革しようというリベラリズムの立場は、このような視点からみるとき、まったく意味のないものとなってしまう。ボウルズとギンタスは、アメリカにおけるリベラル派の教育改革の試みがこれまですべて失敗してしまったのは、アメリカ資本主義体制という抑圧的な政治、経済、社会制度の基本的矛盾に気づかなかったからだという。

しかし、教育機会の均等化を求めて、大きな波のような運動が、世界の多くの国々で起こっている。アメリカで試みられた、オープン・クラスルーム、あるいはフリースクールなどの運動が、学校が真の意味で、人格的発達をたすけ、人間解放の可能性を大きく開くものであるということを、ボウルズとギンタスは否定するものではない。ボウルズとギンタスは、つぎのことは確信をもっていえるという。「抑圧、個人の無力化、所得の不平等、機会の不均等は歴史的にみて、教育制度に起因するものではないし、不平等で、抑圧的な今日の学校から生み出されたものではない。抑圧と不平等の根源は、資本主義経済の構造と機能の中にある。この点に、社会主義の国々をも含めて現代の経済体制を特徴づけるものがあって、人々が経済的生活の管理に参加することを不可能にしている」。

（宇沢弘文『社会的共通資本』より。ただし原文の一部を変更した。）

注1　ジョン・デューイ（一八五九―一九五二年）はアメリカの哲学者・教育思想家。
注2　サミュエル・ボウルズ（一九三九年―）とハーバート・ギンタス（一九四〇年―）はアメリカの経済学者。
注3　法人資本主義とは、法人企業（株式会社）が経済の主要な担い手である資本主義のことである。

問一　本文中の空欄［ア］～［ウ］に入る言葉として最も適切なものを、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ア　a　懐疑　b　肯定　c　妥当　d　否定　e　普遍
イ　a　説得　b　向上　c　合理　d　認知　e　理解
ウ　a　自由　b　典型　c　特殊　d　平等　e　歴史

問二　本文中の空欄［あ］～［う］に入る言葉として最も適切なものを、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

あ　a　けれども　b　すなわち　c　とはいえ　d　ましてや　e　むしろ
い　a　さらに　b　しかし　c　したがって　d　たとえば　e　ところが
う　a　しかし　b　したがって　c　すなわち　d　だから　e　むしろ

問三　傍線部①「リベラリズムの教育理念に対して、大きな修正が加えられる」とは何を意図していたか。ふさわしいものをつぎのａ～ｅの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　専門技術主義＝能力主義によって、学校教育の果たす社会的統合機能が達成される。
ｂ　専門技術主義＝能力主義によって、学校教育の平等主義的機能がさらに達成される。
ｃ　専門技術主義＝能力主義によって、学校教育による個人の人格的発達が達成される。
ｄ　専門技術主義＝能力主義によって、近代産業社会に適合したデューイによる学校教育の理念が達成される。
ｅ　専門技術主義＝能力主義によって、デューイが主張した学校教育の理念にもとづく三つの機能が放棄される。

問四　傍線部②「ヒエラルキー的分業」の内容に最も当てはまるものをつぎのａ～ｅの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　階層的秩序で結びついた企業グループが、社会全体で水平的分業をおこなっていること。
ｂ　法人企業における垂直的分業が経済の社会的関係を規定して、階層的な秩序を形成していること。
ｃ　法人企業の垂直的分業が、政府の権威による資源配分の秩序に有機的に組み込まれていること。
ｄ　法人企業の水平的・垂直的分業が、家族を含む社会の階層的秩序を有機的に構成していること。
ｅ　法人企業における水平的・垂直的な分業が、社会全体の専門技術を高める役割を果たしていること。

問五　傍線部③「内発的な動機にもとづいて、自らの行動を選択するということは、一般の労働者、技術者にとってはほとんど職を失うのと同じ意味をもっている」の内容に最も当てはまるものをつぎのａ～ｅの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　学校教育の目的の一つは社会的統合にもとづいた人材を育てることであり、そこに各人の内発的動機が入る余地はない。

ｂ　学校教育の目的の一つは社会的統合にもとづいた人材を育てることであるが、各人が内発的動機にもとづいて行動すれば、社会的統合が崩壊する。

ｃ　学校教育の目的の一つである人格的発達は各人の職業選択を重視するが、法人資本主義の労働市場の需給関係において選択の不一致がおきやすい。

ｄ　学校教育の目的の一つである人格的発達は個性的なものだが、ヒエラルキー的な法人資本主義のもとでは個性に基づいて働くことが困難である。

ｅ　学校教育の目的の一つである人格的発達は個性的なものだが、法人資本主義のもとでは雇用は景気動向に左右されるため、個人が自らの要望を主張しすぎると就職できない。

問六　本文中の空欄 A は、ボウルズとギンタスが、かれらの主張を要約した文章である。この空欄に入れるのに最もふさわしいものをつぎのa～eの中から一つ選び、解答欄にその記号をマークせよ。

a　学校教育制度は経済的平等を達成しようと努力するが、経済の社会的関係のヒエラルキー的分業に対応して、不平等の再生産という反対物に転化する。

b　学校教育制度は、経済の社会的関係との対応を通じて、経済的不平等を再生産し、人格的発達を歪めるという役割を果たしている。

c　学校教育制度と経済の社会的関係とは、社会的統合の二つの環であり、両者がともに不平等を再生産している。

d　学校教育制度が専門技術主義＝能力主義という反リベラリズムにもとづくようになり、その結果、経済的不平等を再生産するという役割を果たしている。

e　学校教育制度はリベラリズムにもとづいているが、経済の社会的関係との相互依存関係のもとで、人格的発達を歪めるという役割を果たしている。

問七　著者の考えに合致するものをつぎのａ～ｇの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　デューイによる学校教育の平等主義は、機会の平等だけではなくて結果の平等を実現する。結果の平等とは、所得の再分配によって平均的所得水準が高まることである。

ｂ　デューイによる学校教育の理念を修正した専門技術主義＝能力主義は、ヒエラルキー的分業にもとづく法人資本主義のもとで、不平等の拡大をまねいている。

ｃ　現代における教育機会均等化を求める運動の根底には、デューイの主張した学校教育の理念が生きているが、法人資本主義のもとでは、「偉大な平等化装置」とはいえない。

ｄ　専門技術主義＝能力主義は、所得、権力、地位の分配の制度に組み込まれた若者を育てるという意味で、デューイによる学校教育の三つの機能のうち、社会的統合に重点をおくものである。

ｅ　ボウルズとギンタスは、学校教育のリベラリズムを実現するためには専門技術主義＝能力主義による社会的統合にかえて、若者の個性的な人格的発達こそが重要であるという。

ｆ　ボウルズとギンタスは、デューイによる学校教育の三つの機能は政治、経済、社会制度の矛盾を反映しているために、現代においては有効性を持たないと考えている。

ｇ　六〇年代のアメリカでは、教育の機会均等を目指した民主的改革が行われたが、それがこれまですべて失敗した原因はヴェトナム戦争をはじめとしたアメリカ社会の倫理的崩壊によるものであった。

〔二〕 次の文章は、詩人谷川俊太郎が三好達治の死に対する想いを書いた手紙である。文章を読んで後の問いに答えよ。

石原八束様

顔の上にかぶせられた白い布をもちあげたのも、最後にもういちど顔をみておきたいという気持からではなく、①ただ自分の眼で、亡くなったことをたしかめておかねばならぬ、そうしなければ納得できないという気持ちからでした。もし本当に、亡くなってしまったのなら、三好さんはもうこんな所にぐずぐずしてはいないということは、私にははっきり分っていたのですから。自分の意思で笑うことも、うなずくこともできない死顔などというものをのぞかれるのは、三好さんはおいやだったに相違ないのです。［A］、勝手に死顔をのぞく人々を、三好さんは優しく許していらしただろうし、もしかすると感謝さえしていらしたかもしれませんが。

哀しみも辛さもまだ意識がなかったのに、外へ出て、初夏のような陽に照らされた道をわたろうとした時、［B］がケイレンのように私を襲い、私を驚かせました。私の中の受信装置が、勝手にどこかからの信号を受信しはじめたような工合でした。シャックリのようなそれは、それからも数日の間、何の前ぶれもなく私を襲い、私ははじめて、哀しみというものは、精神よりも先に肉体のものなのだということを悟りました。けれどその哀しみは、（それをそう呼んでいいのかどうかも、さだかではありませんが）重苦しいものではなく、②むしろ一種の解放感さえ伴った、軽く、さわやかなものでした。それは私にとっては、初めての種類の哀しみで、他のいかなる哀しみとも違う、特別の哀しみでした。

父を連れて、戻ってきた時、石原さんが、亡くなった前後のことを報告なさるのを聞きました。石原さんが淡々と、しかし正確ということに心を配られて説明なさるのを聞いて、私は安心しました。それが三好さんにふさわしかったし、また、死というものが、三好さんに対しては、そんなに威力をもっていないという私の感じを、裏づけてくれるようにも思えたからです。肉親の方々のお気持ちを無視するわけではありませんが、石原さんも御存知のように、ここ数年私は殆ど年に一回ずつしか三好さんにお会いしなかったので、私の三好さんははじめから、私の記憶と想像の中に住んでいらしたような所があり、その故

か、三好さんはとっくに私の中で、不死の存在になっていたことに、私はやっと気づいたのです。

夕方、高田敏子さんたちと買い物に出て、私はひとりぼんやりと、にぎやかな町角に立っていました。私のかたわらを歩いてゆく老若男女、せわしげなトラックやオートバイ、蛍光灯の光、それに照らされた野菜や、肉や荒物—そんなこの世のすべての存在と、三好さんの死とが、突然私には、わかち難く結びついているように思えたのです。この世から、三好さんは消失したのでもないし、脱落したのでもない、むしろ亡くなってはじめて本当の所を得て、三好さんはこの人間の世界にいるのです。すぐれた詩とはなんと［　C　］ものなのでしょう、三好さんの詩を読めば、私は今も精神ばかりではなく、三好さんの肉体までも、即ち生きている三好さんの全体を感じることができるように思います。そして三好さんの死そのものまでが、その夕暮れの世界に生きているわれわれの、有機的な一部分なのだと思われたのです。すべてが自然で、おそろしいばかりに調和がとれていた、私は恐怖も欠ジョ(ア)感もなく、そのくせ何か人間のものではないような、宇宙の存在そのもののもつ哀しみとでもいったような感情にとらえられて、立っていました。不ソン(イ)なようですが、その時、③私は三好さんの眼をかりて世界を眺めていたような気がしてなりません。

焼場で、炉の扉が大きな音をたてて閉じられたとき、三好さんが④梶井基次郎にむかって、「おつつけ僕から訪ねよう！」とおっしゃった意味が素直に私にも納得できました。そんな風に心安く言うことは、同輩でもない私には許されぬことでしたが、その時、亡くなった三好さんが、生きていらした三好さんよりも、私にはどこか親しく、どこか若々しく感じられ、私はいつか三好さんが私にむかってなさったように、少しせわしくうなずきながら、「じゃあ、また」という風に御挨拶しました。もういちど三好さんに会えるということを、私は感傷でもなんでもなく、ごく正確に、ただそれだけのこととして、信じています。

もう何年も前のことですが、夜半に電話で酒のお誘いを受けたことがありました。仕事があったので、私はそれをお受けしませんでした。お誘いは再びは無く、お宅に伺ったときも、私には酒を強いられることもありませんでしたし、帰りをひきとめられることもありませんでした。私はそれが嬉しくもあり、けれどもまた、少しわびしくもあったようです。そんな風にしか、三好さんとおつきあいのできなかった自分を、もどかしくも思うのですが、結局私にはそれしかできず、ですからお通夜

にも加わりませんでした。

注文に応じて、追トウ(ウ)めいた文章を書く気にはどうしてもなれず、かといって、何も書かずにおくこともできませんでしたので、押しつけがましく、石原さんにお手紙をさしあげることにしてしまいました。形にならぬまま、いろいろなことを思い、それをくどくどと、子供の綴方(つづりかた)のように書きたいと思っていたのですが、いざ書き始めてみると、そんなに［D］には、やはり書けませんでした。

意にみたぬ手紙です。どうかお読み捨て下さい。

（谷川俊太郎『散文』より。ただし原文の一部を変更した。）

問一　本文中の空欄［A］～［D］に前後の文脈から入る最も適切な語句をつぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

A　a　そのうえまた　b　したがって　c　けれどまた　d　あるいはまた　e　なぜなら

B　a　驚愕　b　苦悶　c　寂寥(りょう)　d　虚無感　e　嗚咽

C　a　なまなましい　b　清々しい　c　神々しい　d　おくゆかしい　e　なまめかしい

D　a　冷静　b　詳細　c　無心　d　真面目　e　迂遠(う)

問二　つぎの問いに答えよ。

A　傍線部④の梶井基次郎の作品はどれか。あてはまるものをつぎの作品名のa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　灰色の月　　b　黒い雨　　c　城のある町にて

d　舞姫　　e　蟹工船

B　谷川俊太郎の作品はどれか。あてはまるものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　友情　　b　二十億光年の孤独　　c　山羊の歌

d　一握の砂　　e　月に吠える

問三　傍線部①の「ただ自分の眼で、亡くなったことをたしかめておかねばならぬ、そうしなければ納得できないという気持ちからでした」とあるが、著者がそう思った理由について最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　若々しい三好さんが亡くなったことを、どうしても信じられなかったから。

b　突然の訃報に驚いて、信じたくないという気持ちがあったから。

c　三好さんの死を受け入れて、気持ちの整理をつけなければと思ったから。

d　石原さんの報告を聞いて、三好さんの死を受け入れられなかったから。

e　三好さんはここ数年、私の心の中で、既に不死の存在になっていたから。

問四　傍線部②の「むしろ一種の解放感さえ伴った、軽く、さわやかなものでした」とあるがその理由について最も適切なものをつぎのａ～ｅの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　三好さんは亡くなってはじめて本当に所を得て、我々の世界にいるのだと実感できたから。
ｂ　三好さんはこの世から消失したのでもないし脱落したのでもなく、その魂は宇宙に飛翔したから。
ｃ　三好さんは私の想像と記憶の中でとっくに不死の存在になっており、死が信じられなかったから。
ｄ　三好さんが苦しまずに死に際を迎えたことで、三好さんへの罪悪感から解放されたから。
ｅ　三好さんの肉体も精神も人間世界からは消失したが、調和がとれた広い宇宙に存在しているから。

問五　傍線部③の「私は三好さんの眼をかりて世界を眺めていたような気がしてなりません」とあるが、それはどのような意味か。最も適切なものをつぎのａ～ｅの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　三好さんの詩を通して、世の中を眺める詩人としての着眼点に気がついた。
ｂ　三好さんの詩を通して、この世界の調和や宇宙の存在の哀しみを感じることができた。
ｃ　三好さんの死を通して、初めて詩人としての目が開かれて世界を眺められた。
ｄ　三好さんの死をきっかけに、この世のすべての存在の美しさに気づいた。
ｅ　三好さんの死をきっかけに、人間の世界の悲しみを感じることができた。

問六　本文の内容に合致するものをつぎのa～gの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　精神性ばかりでなく肉体までも感じるようなリアルさをもっている詩はすぐれていると著者は思っている。

b　この世のすべての存在の美しさと哀しみを表現した詩のみがすぐれていると著者は考えている。

c　死というものは概して重苦しいものではなく、さわやかなものであると著者は感じた。

d　三好達治の死から、肉体は無くなっても、人間はこの世に不死の存在としてあり続けることができると著者は感じた。

e　生前三好達治からの酒の誘いを断わってしまい、親しいおつきあいができなかったことに著者は自責感を抱いている。

f　三好達治の死を通して、人間は皆不死の存在であり、肉体が無くなっても不死の世界に帰っていくことを著者は理解した。

g　三好達治が梶井基次郎に「おつつけ僕から訪ねよう」と言ったのは、三好の中で梶井が不死の存在となっていたからと思われる。

問七　傍線部(ア)～(ウ)のカタカナ部分にふさわしい漢字を含む文章を、つぎの各群のa～e中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(ア)　欠ジョ

a　ジョ説を読んで理解する。
b　ジョ才なく立ち回る。
c　注意深くジョ行する。
d　ジョ夜の鐘の音を聞く。
e　ジョ勲を授かる。

(イ)　不ソン

a　ソン大に振る舞う。
b　ソン色がない。
c　ソン得を計算する。
d　子ソンを残す。
e　ソン亡をかけて戦う。

(ウ)　追トウ

a　政党でトウ議を行う。
b　資産をトウ結する。
c　先代の方法をトウ襲する。
d　美しさにトウ酔する。
e　葬式でトウ辞を述べる。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

遠浅の海辺。砂浜が緩やかな弓形に広がる。海を渡ってくる風が強い。空が海に溶け、海が陸地に接する場所には、生命の謎を解く何らかの破片が①サンイツしているような気がする。だから私たちの夢想もしばしばここからたゆたい、ここへ還る。

ちょうど波が寄せてはかえす接線ぎりぎりの位置に、砂で作られた、緻密な構造を持つその城はある。ときに波は、深く掌を伸ばして城壁の足元に達し、石組みを模した砂粒を奪い去る。吹きつける海風は、城の望楼の表面の乾いた砂を、薄く、しかし絶え間なく削り取っていく。ところが奇妙なことに、時間が経過しても城は姿を変えてはいない。同じ形を保ったままじっとそこにある。いや、正確にいえば、姿を変えていないように見えるだけなのだ。

砂の城がその形を保っていることには理由がある。眼には見えない小さな海の精霊たちが、たゆまずそして休むことなく、削れた壁に新しい砂を積み、開いた穴を埋め、崩れた場所を直しているのである。それだけではない。海の精霊たちは、むしろ波や風の先回りをして、壊れそうな場所をあえて壊し、修復と補強を率先して行っている。それゆえに、数時間後、砂の城は同じ形を保ったままそこにある。おそらく何日かあとでもなお城はここに存在していることだろう。

しかし、重要なことがある。今、この城の内部には、数日前、同じ城を形作っていた砂粒はたった一つとして留まっていないという事実である。かつてそこに積まれていた砂粒はすべて波と風が奪い去って海と地にもどし、現在、この城を形作っている砂粒は新たにここに盛られたものである。つまり砂粒はすっかり入れ替わっている。そして砂粒の流れは今も動き続けている。にもかかわらず楼閣は確かに存在している。つまり、ここにあるのは実体としての城ではなく、流れがつくり出した「効果」としてそこにあるように見えているだけの動的な何かなのだ。

さらにいえば、砂の城を絶え間なく分解し同時に再構成している海の精霊たちでさえ、自らそのことに気づいていないにもかかわらず、彼らもまた砂粒から作られている。そしてあらゆる瞬間に、何人かが元の砂粒に還り、何人かが砂粒から新たに生み出されている。精霊たちは砂の城の番人ではなく、その一部なのだ。

むろん、これは比喩である。しかし、砂粒を、自然界を大循環する水素、炭素、酸素、窒素などの主要元素と読みかえさえすれば、そして海の精霊を、生体反応を［A］酵素[注1]や基質[注2]に置き換えさえすれば、砂の城は生命というもののありようを正確に記述していることになる。生命とは要素が集合してできた構成物ではなく、要素の流れがもたらすところの効果なのである。

このシンプルな、しかし転換的な生命観を私たちが本当の意味で発見したのはそれほど昔のことではない。(1)私たち、という言い方はもちろん公平ではない。この事実を精密な実験で、つまりマクロな現象をミクロな解像力をもって証明したのは、ルドルフ・シェーンハイマー[注3]という人物であり、それがなされたのは一九三〇年代後半のことだった。つまり私たちは、まったく新しい生命観に②ソウグウしてからまだたった七十年程度を経たにすぎず、しかも彼が明らかにしたものの意味を十分ア咀嚼（そしゃく）できたわけでもない。むしろ私たちは彼の名と彼の業績を忘れかけさえしているのだ。

浜辺に打ち寄せるある波が、たまたまその一回だけに限って、砂粒の代わりにコーラルピンクのサンゴの微粒子を運んできたとしよう。海の精霊たちは砂粒とサンゴの粒を区別することなく、そのサンゴ粒を使って砂の城を補修する。崩れた壁、開いた穴、崩れた場所に、砂の代わりにサンゴを詰める。するとそこには何が見えることになるだろうか。

砂の城はこのとき、ちょうどダルメシアン犬のように、砂地の各所にサンゴ色のスポットがちりばめられた斑点模様を呈するだろう。しかしこのとき私たちが目を凝らして見るべきものは模様そのものではなく、模様が流れる様子とその速度なのだ。

サンゴの微粒子を運んできた波は、次の回からは普段どおり、普通のくすんだ砂を波打ち際に運ぶ。海の精霊たちは黙々と自分たちの作業を続ける。削れた壁、開いた穴、崩れた場所に砂を盛る。するとサンゴの粒でできたピンク色の斑点はしばらくの間、その場所に留まったものの、やがては後から来る砂粒にその場を［B］ことになる。つまりサンゴが浮かび上がらせた模様は城を通り抜けて流れていき、城の一部として固定されることはない。

そしてこのことはサンゴの粒にだけ当てはまることではなく、すべての砂粒ひとつひとつにいえることでもある。砂粒はある瞬間、城のいずれかの一部でありつつ、次の瞬間には城から流れ去り、後から来た砂粒がその場所を［C］。サンゴの

粒は、ちょうど澄みすぎて流れが見えづらい渓流にインクを垂らしたかのように、その流れと速度を可視化(イ)したのである。

シェーンハイマーにとってのピンク色のサンゴ粒は同位体[注4]というものだった。ちょうど彼が研究を始める頃までに、水素、炭素、窒素などの主要な元素には同位体(アイソトープ)と呼ばれるものが存在することが明らかになり、実際にそれを人工的に作り出すことが可能となっていた。

窒素は原子番号7の元素である。普通の窒素原子の原子核には陽子が七個、そして中性子が同じく七個含まれ、その重さ(質量数)は陽子と中性子の和、すなわち14と表される。ところが自然界に存在する膨大な数の窒素原子の中にはわずかながら変わり種が存在し、その原子核には陽子七個、中性子が八個存在するものがある。その結果、この変わり種窒素の質量数は15となる。これが重窒素である。窒素としての化学的性質には変わりがないが、わずかだけ重い。普通の窒素と重窒素は質量分析計を用いることによって見分けることができる。

シェーンハイマーはこの重窒素を、サンゴの砂として、つまり標識をつけた「追跡子(トレーサー)」として生物実験に使用するという画期的なアイデアを思いついたのだった。

タンパク質を構成するアミノ酸にはすべて窒素が含まれている。ひとたび食べてしまえば普通、そのアミノ酸は体内のアミノ酸にまぎれて行方を追うことは不可能となる。しかし、重窒素をアミノ酸の窒素原子として挿入すれば、そのアミノ酸は識別できる。色の違いからサンゴの砂がどこから来ていずこへ去るのかを追跡できるように、他のアミノ酸と区別して、重さの違いから重窒素を含むアミノ酸をずっと追跡できることになる。

かくして大発見への準備がととのえられた。普通の餌で育てられた実験ネズミにある一定の短い時間だけ、重窒素で標識されたロイシンというアミノ酸を含む餌が与えられた。波がサンゴの砂を運んできたのだ。このあとネズミは殺され、すべての臓器と組織について、重窒素の行方が調べられた。他方、ネズミの排泄物もすべて回収され、追跡子の③シュウシが算出された。

ここで使用されたネズミは成熟したおとなのネズミだった。これにはわけがある。もし、成長の途上にある若いネズミならば、摂取したアミノ酸は当然、身体の一部に組み込まれるだろう。しかし成熟ネズミならもうそれ以上は大きくなる必要はな

い。事実、成熟ネズミの体重はほとんど変化がない。ネズミは必要なだけ餌を食べ、その餌は生命維持のためのエネルギー源となって燃やされる。だから摂取した重窒素アミノ酸もすぐに燃やされてしまうだろう。当初、こうシェーンハイマーは予想した。当時の生物学の考え方もそうだった。アミノ酸の燃えかすに含まれる重窒素はすべて尿中に出現するはずである。

しかし実験結果は彼の予想を鮮やかに裏切っていた。

重窒素で標識されたアミノ酸は三日間与えられた。この間、尿中に排泄されたのは投与量の27・4％、約三分の一弱だけだった。糞中に排泄されたのはわずかに2・2％だから、多くのアミノ酸はネズミの体内のどこかにとどまったことになる。

では、残りの重窒素は一体どこへ行ったのか。答えはタンパク質だった。与えられた重窒素のうちなんと半分以上の56・5％が、身体を構成するタンパク質の中に取り込まれていた。しかも、その取り込み場所を［　D　］と、身体のありとあらゆる部位に分散されていたのである。特に、取り込み率が高いのは腸壁、腎臓、脾臓、肝臓などの臓器、血清（血液中のタンパク質）であった。当時、最も④ショウモウしやすいと考えられていた筋肉タンパク質への重窒素取り込み率ははるかに低いことがわかった。

実験期間中、ネズミの体重は変化していない。これは一体どのようなことを意味するのだろうか。

タンパク質はアミノ酸が数珠玉のように連結してできた生体高分子[注5]であり、酵素やホルモンとして働き、あるいは細胞の運動や形を［　E　］最も重要な物質である。そしてひとつのタンパク質を合成するためには、いちいち一からアミノ酸をつなぎ合わせなければならない。つまり、重窒素を含むアミノ酸が外界からネズミの体内に取り込まれて、それがタンパク質の中に組み込まれるということは、もともと存在していたタンパク質の一部分に重窒素アミノ酸が挿入される――ちょうどネックレスの一箇所を開いてそこに新しい球をひとつ挟み込むように――、というふうにはならない。そうではなく、重窒素アミノ酸を与えると瞬く間にそれを含むタンパク質がネズミのあらゆる組織に現れるということは、恐ろしく速い速度で、多数のアミノ酸が一から紡ぎ合わされて新たにタンパク質が組み上げられているということである。

さらに重要なことがある。ネズミの体重が増加していないということは、新たに作り出されたタンパク質と同じ量のタンパ

ク質が恐ろしく速い速度で、バラバラのアミノ酸に分解され、そして体外に捨て去られているということを意味する。

つまり、ネズミを構成していた身体のタンパク質は、たった三日間のうちに、食事由来のアミノ酸の約半数によってがらりと置き換えられたということである。もし重窒素アミノ酸を三日間与えたあと、今度は、普通のアミノ酸からなる餌でネズミを飼い続ければ、一度は身体のタンパク質の一部となった重窒素アミノ酸がほどなくネズミの身体を脱して体外に捨て去られていく様子が観察されることになる。つまり、砂の城はその形を変えず、その中をサンゴの砂粒が通り過ぎていくのとまったく同じことがここでは行われているのだ。

さらにシェーンハイマーは、投与された重窒素アミノ酸が、身体のタンパク質中の同一種のアミノ酸と入れ替わったのかどうかを確かめてみた。つまりロイシンはロイシンと置き換わったかどうかを調べたのである。

ネズミの組織のタンパク質を回収し、それを加水分解してバラバラのアミノ酸にする。二十種のアミノ酸をその性質の差によってさらに分別する。そして各アミノ酸について、重窒素が含まれているかどうかを質量分析計にかけて解析した。確かに実験後、ネズミのロイシンには重窒素が含まれていた。しかし、重窒素を含んでいるのはロイシンだけではなかった。他のアミノ酸、すなわち、グリシンにもチロシンにもグルタミン酸などにも重窒素が含まれていた。

体内に取り込まれたアミノ酸（この場合はロイシン）は、さらに細かく分断されて、あらためて再分配され、各アミノ酸を再構成していたのだ。それがいちいちタンパク質に組み上げられる。つまり、絶え間なく分解されて入れ替わっているのはアミノ酸よりもさらに下位の分子レベルということになる。(2)これはまったく驚くべきことだった。

外から来た重窒素アミノ酸は分解されつつ再構成されて、ネズミの身体の中をまさにくまなく通り過ぎていったのである。しかし、通り過ぎたという表現は正確ではない。なぜなら、そこには物質が「通り過ぎる」べき入れ物があったわけではなく、ここで入れ物と呼んでいるもの自体を、通り過ぎつつある物質が、一時、形作っていたにすぎないからである。

つまりここにあるのは、流れそのものでしかない。

――（中　略）――

シェーンハイマーは、この自らの実験結果をもとにこれを「身体構成成分の動的な状態」と呼んだ。彼はこう述べている。

生物が生きているかぎり、栄養学的要求とは無関係に、生体高分子も低分子代謝物質もともに変化して止まない。

I

新しい生命観誕生の瞬間だった。

（福岡伸一『生物と無生物のあいだ』より。ただし原文の一部を変更した。）

注1　酵素　生体内で起こる化学反応に触媒として作用する高分子物質。生体内での代謝に関与する。

注2　基質　酵素によって化学反応を触媒される物質。

注3　ルドルフ・シェーンハイマー　ドイツ生まれのアメリカ合衆国の生化学者。一八九八年生まれ～一九四一年没。

注4　同位体　原子番号が同じで、質量数が異なる元素。アイソトープ。

注5　生体高分子　糖質、タンパク質、核酸など、生体内に存在する高分子の有機化合物のこと。

問一　傍線部ア～ウの語句の意味として最も適切なものを、つぎの各群のa～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ア　咀嚼（そしゃく）

a　飲み込むように自分のものにすること
b　消化するようにすべてを吸収すること
c　研ぎ澄ますようにみがくこと
d　靴を履きつぶすように使い込むこと
e　噛み砕くようにじっくり理解すること

イ　可視化

a　計器で測定できるようにすること
b　色素で色づけすること
c　眼で見えるようにすること
d　指で示すことができるようにすること
e　輪郭を明確にすること

ウ　くまなく

a　油断なく
b　すばやく
c　なめらかに
d　すみずみまで
e　無心で

問二　本文中の空欄 A ～ E に入る適切な語句を、つぎの語群a～eの中からそれぞれ一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　譲る　b　襲う　c　探る　d　つかさどる　e　支える

問三　傍線部(1)「私たち、という言い方はもちろん公平ではない」と著者が言う意図として適切であると考えられるものをつぎのa～eの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　私たちが皆、砂粒を水素や炭素などの主要元素と見立て、海の精霊を酵素や基質に置き換えるような比喩の意味を理解できるわけではない。

b　シェーンハイマーの名前や業績、そして彼が発見した転換的な生命観について、私たちが等しく理解しているとは言えない。

c　私たちの大半は、生命とは要素の流れがもたらすところの効果であるというシェーンハイマーの生命観を受け入れることができない。

d　私たちの多くは現在でも、生命とは要素が集合してできた構成物であると信じている。

e　シェーンハイマーが発見した生命観からまだ七十年程度が経ったにすぎず、このような生命観が私たちに広く知られているとは言いがたい。

問四　傍線部(2)「これはまったく驚くべきことだった」と著者が述べる理由はどのようなものか、最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　投与されたアミノ酸が、身体のタンパク質中の同一種のアミノ酸と入れ替わったことが確かめられたため。

b　確かに実験後、シェーンハイマーの予想通りにネズミのロイシンには重窒素が含まれていたため。

c　ネズミの排泄物のアミノ酸を分析したところ、重窒素を含んでいるのはロイシンだけではなく、グリシンやチロシンやグルタミン酸など他のアミノ酸にも重窒素が含まれており、ネズミの組織のアミノ酸の分析結果とは違っていたため。

d　体内で絶え間なく分解されて入れ替わっているのは、タンパク質中の同一種のアミノ酸ではなく、それよりもさらに下位の分子レベルである、ということは予想されていなかったため。

e　普通のアミノ酸からなる餌でネズミを飼い続けたときに、一度は身体のタンパク質の一部となった重窒素アミノ酸がほどなくネズミの身体を脱して体外に捨て去られてゆく様子が観察されたため。

問五　本文中の空欄 I に入る文章として最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a　生命とは代謝の持続的変化であり、この変化こそが生命の真の姿である。

b　生命とは基質の不変的恒常性であり、この恒常性こそが生命の真の姿である。

c　生命とは元素の相互的置換であり、この置換こそが生命の真の姿である。

d　生命とは重窒素の分散的摂取であり、この摂取こそが生命の真の姿である。

e　生命とは物質の通過の容器であり、この容器こそが生命の真の姿である。

問六　本文の内容に合致するものをつぎのａ～ｇの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ａ　海が陸地に接する場所には生命の謎を解く手がかりが隠されており、そのような場所での夢想が新しい転換的な生命観を誕生させるきっかけとなった。

ｂ　波打ち際に立つ砂の城がその形を保ちながら、数日後にはその内部に同じ砂粒はたった一つとして留まっていないというイメージは、精霊たちがつくり出している生命の神秘を表現する適切な比喩である。

ｃ　生命とは、主要元素などの要素が集合してできた構成物ではなく、要素の流れがもたらすところの効果である。

ｄ　シェーンハイマーが窒素の同位体である重窒素を、標識をつけた追跡子として生物実験に使用するというアイデアを思いついたのは、画期的なことだった。

ｅ　シェーンハイマーが実験に使用したのはおとなのネズミだったが、それは成長途上の若いネズミならば摂取したアミノ酸はただちに体外に排泄されてしまい、身体の組織の中に残らないと考えられたからである。

ｆ　重窒素を含むアミノ酸が外界からネズミの体内に取り込まれて、それがタンパク質の中に組み込まれるということは、ちょうどネックレスの一箇所を開いてそこに新しい玉をひとつ挟み込むように、もともと存在していたタンパク質の一部分に重窒素アミノ酸が挿入されるということである。

ｇ　世界に存在するあらゆる物質は、絶えず変化してやまない流れそのものでしかない。

問七　傍線部①～④のカタカナにふさわしい漢字を、つぎの各群のa～hの中からそれぞれ二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

① サンイツ

a 散　b 参　c 産　d 撒　e 迭　f 溢　g 逸　h 壱

② ソウグウ

a 捜　b 遭　c 漕　d 奏　e 遇　f 寓　g 隅　h 偶

③ シュウシ

a 集　b 終　c 拾　d 収　e 支　f 始　g 資　h 止

④ ショウモウ

a 昇　b 招　c 消　d 承　e 望　f 耗　g 妄　h 網